

# 空襲で焼けた樹木



東京の記憶  
戦後65年

浅草寺の境内に、深頼朝が植えたといわれるイチヨウの木がある。樹齢約800年。本堂側から見れば、堂々たる大木だが、裏に回ると内側がえぐれ、幹の表面が黒くなっている様子が目に飛び込んでくる。

「65年前、東京大空襲で焼けた跡です」

浅草で人力車の車夫を務める岡崎屋次郎さん(43)が教えてくれた。

確かに、鼻を近づけると焦げ臭いにおいがして、黒くなっている部分を指でこすると、手にすずが付く。

空襲からしばらくは本堂側も焦げ跡が目立ったが、風雨にさらされるうちにすずが取れ、普通の木と同じように見えるようになった。

「木は焼けても生き続ける。戦災を経験した木は、65年たった今でも、戦中の記憶を継いで物語っている」と岡崎屋さんは話す。

岡崎屋さんが、このような「戦災樹木」に関心を持ったのは、浅草で車夫を始めた1997年頃。客に浅

## 焦げた幹 沈黙の語り部

草の歴史や見所を導くために、浅草寺の境内をくまなく歩いた時、何本か黒く焦げたような木があることに気付いた。

最初は焦げた理由が分からなかったが、本などで調べると、45年3月10日の東京大空襲で焼けたことを知る。観光客でにぎわい、人通りが多い場所に生えているにもかかわらず、意外と知られていなかった。

初めは、客相手にそのことを話していたが、人力車に乗るのは年配者を中心。「本堂に伝えなければいけない相手は、子どもたちではないか」。そう考え、99年から浅草を訪れる修学旅行生らに戦災樹木を紹介するボランティアを始めた。

活動の中で最近、感じる

ことがある。それは、戦争体験者の高齢化だ。「いずれば、自分たちのような戦争の未体験者が戦争を語りなくてはいけなくなる」

だから、ガイドの最後は、こづつ細くくるようにして

いる。「次に浅草に来たときに、あなたが木木存在を伝えてください」

戦災樹木について調べている人がいる。「よみがえった黒く焦げたイチヨウ(大日本図書)などの著書がある元都立高校教諭の唐沢孝一さん(67)。岡崎屋さんが浅草寺のイチヨウについて教えを請うた相手だ」

唐沢さんによると、都内では、浅草寺のイチヨウのような戦災樹木が70か所以上で見つかっている。宅地

化などで切られる木が多い中、主に神社や寺の境内に残っていることが多いという。「ご神木として大切にされているためでしょうか」と唐沢さんは言う。

### 立ち続け 戦災伝える

初めは黒く焦げた木を見つけたのは1995年5月、文京区の湯島聖堂を散歩していたときのことだ。何気なくイチヨウの木を見つめ、幹の半分が少し前まで燃えていたように黒く焦げていた。しかし、結わ

いたわけではなく、幹の半分は盛り上がるように成長を続けている。「木の生命力に感動すると同時に、なぜ燃えたのだろうか」と勇気がわいてきた

唐沢さんが区や市に残る古い資料を調べ、現地を訪ねて、戦争経験者に話を聞くと、木にまつわる思い出を次々と語ってくれた。戦争の記憶は、木と深くつながっている、そう感じたという。

唐沢さんは言う。「一人の記憶は風化するが、木に刻まれた記憶は世代を超えて残る。戦災樹木の存在を多くの人に知ってもらうことが、戦争の悲惨さを語り継ぐことにつながる」

(本田史樹、34歳)



分かった。燃えてもな再生を続けるイチヨウの木。時間を超えて悲惨な状況を訴えているように感じた。「この声に耳を傾けないといけない」。そう考え、全国に残る戦災樹木を調べることになった。

△空襲で逃げ回って戻ってきたら、木の所で火が止まっていた。木がなければ助からなかったかもしれない

△いつも遊んでいた神社の木が焼けてしまったのを見て、本当に悲しかった。でも、5年ほどたって新しい芽が出てきたときは、自分も頑張らないといけないと勇気がわいてきた

戦争が終わって65年、「あの時代」の「あの場所」を知る人を訪ねます。読者の皆さんの体験や感想を江東支局へお寄せ下さい。あて先は、このページの左上にあります。